

## 禁酒国で飲むビールの味⑤

近藤 節夫 (日本ペンクラブ理事)

5年前「IS」(イスラム国)のテロリストが暗躍するアラブの王国ヨルダンへ出かけた。実はそれより遥か半世紀前の1967年に初めてヨルダンを訪れていた。第3次中東戦争(俗に「6日間戦争」)の直後で国内中が緊張感でピリピリしていた時だった。首都アンマンには戦雲が重く立ち込め軍の戒厳令が敷かれたまま、その物々しい空気は人々の間にも刺々しいムードを感じさせていた。そんな中を私は大きなザックを背に、たったひとりでこの戦乱の地へやって来た。イスラム教のモスクからは、けだるそうなコーランの読誦が聞こえてくるアンマン市内の安宿に旅装を解くと翌朝早速街へ探索に出かけた。

アンマン市街には未だ戦争ムードが溢れ、勇ましい戦車の隊列が目の前を通り過ぎて行った。市内のあちこちに銃を構えた兵士たちの警戒の目が光っていた。戦争はほんの6日間で止んだが、戦時色丸出しの街中を歩くには、後から思えばもっと用心深い警戒心が必要だった。だが、若気の至りで怖いもの知らずだった当時の私は、無警戒にもカメラを肩にホテルから路地裏を駆け抜けると見晴らしのいい小高い丘の上へ躍り出た。

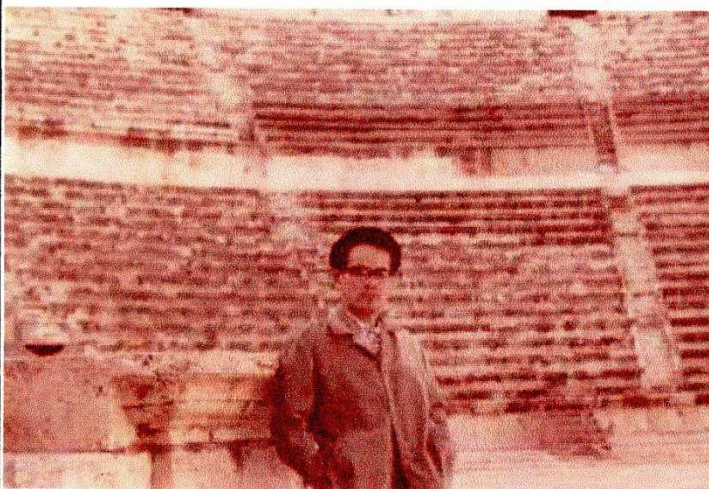


一九六七年第3次中東戦争直後のアンマン市中心街

ところが、そこへ突如10名ばかりのヨルダン軍武装兵士がどっと現れ、あっと言う間に包囲され胸元にライフル銃を突き付けられてしまったのである。次第に恐怖感が募り、身体中がゾクゾクしてきた。迂闊と言えば、あまりにも迂闊で無防備だった。現地の人々が好奇な目で見守る中をホールド・アップさせられて武装兵士らに包囲されたまま宿まで連行され、厳しい取り調べを受けることになっ

た。1時間余りもしつこく尋問された後に漸く不審な人物ではないと分かってもらい、釈放された。

そしてあの身柄拘束事件から早くも半世紀近くが経過した。緊迫した戦争状態は多少なりとも落ち着いたに違いない。そんなアンマンの街を訪れ捕捉された現場で、あの時どうしてヨルダン軍兵士に身柄を拘束された



ローマ古代劇場。この後市内で身柄拘束される

のか自分なりに検証し考えてみたいとの気持ちが鎌首をもたげてきた。己の不注意と軽率さを反省しつつ、当時の臨場感を改めて現場で身体ごと感じてみたくなり、拘束現場の実証検分に出かけたのである。

アラブの火薬庫と言われるヨルダン川西岸地区を取り巻く環境は、半世紀を経て大分落ち着いた。かつての戦争当事国間の往来も比較的自由だった。幸い「6日間戦争」では敵対国だったイスラエルのエルサレムや、パレスチナ自治区、世界遺産「ペトラ遺跡」も訪れることが出来た。

しかし、再訪を焦がれていた小高い丘の上の拘束された現場周辺は、実際に訪れてみるとそのスポットをここどとはっきりとは断定し難かった。丘の上には当時なかったブロック建ての住宅が建ち、捕まった時興奮していたせいもあり、ほんの土地勘でうっすらと思い出せた程度だった。それでもその場で半世紀前窮地に追い込まれた事件をぼんやり思い出して、しばし感慨に浸った。再訪して拘束現場の土を踏んでみたいとの一念は、ひとまず果たすことが出来た。この一角は正にわがアドベンチャラス人生のスタート・ポイントとも呼べる場所だ。